

R18
For Adult Only

墮落の百合天使

目次

< 墮天 > inoino

4p ~ 15p

< 邪悪の樹 > 黒司

16p ~ 27p

< 蝶々 > 魂神

28p ~ 47p



墮天

儀式のための生贄。

極上の天使が魔法陣の上で両手両足を醜悪な肉の枷に埋め込まれ、磔にされていた。

天使の名はエンジェルリリィ。かつて悪魔族と死闘を繰り広げた愛天使の一人。

禍々しい瘴気に満ち溢れた邪悪なる礼拝所。悪魔を讃える呪文が低く響き、その都度肉の

枷がヒクヒクと動く。気を失っているリリィはその都度呻き声を漏らして身を振らせた。

その生贄を囲む無数の影。悪魔を崇拝する邪教の信徒達が、彼らの崇拝する神に向かって一心不乱に祈りを捧げていた。

その信者達の一部、魔法陣に最も近い信者達は、皆、それぞれにイチモツをその手に握り、眠る愛天使を見下ろしながら一心不乱にイチモツを上下にしごいていた。

異様な光景と言うしか無い。イチモツをしごく信者が達すると、その精液が弧を描いてエンジェルリリィの身体を汚す。そして入れ替わり立ち代わり、信者たちがその行為を行う。彼ら邪教の徒にとって、汚すのではなく清めているのだろう。天使の愛の力に触まれたその身体を、悪魔の力によって取り除かねばならない。

その邪悪な儀式は果たして天使を単なる生贄としているだけではない。この天使の身体そのものを必要とするのだ。

次第にリリィの身体に付着する精液の量が増えていく。それはリリィの身体を外れ、魔法陣の上にも飛び散り、辺り一面が精液まみれとなっていた。そして、そこから発せられる生臭い臭い。常軌を逸した行為と光景。

「うっ……」

(あれ……私、どうして眠って……)

そのあまりにも濃密した精液の匂いに、ようやくリリィが目覚め始める。

(なんですかの……この、匂い……)

頬へと付着した精液。体中がべとつく感触。そして動かすことの出来ない手足。

「え、え!? どうして、こんな!？」



覚醒したリリィだったが、その目の前に広がる光景に戸惑い、その行為に驚愕した。

「何をしていますの貴方方！ い、今すぐこれを……」

そうやって眺める手足を飲み込む肉塊。

「ひっ！？ は、離しなさいっ！！」

一瞬その不気味さに気圧されるも、愛天使としての威厳で命じる。だが見ればその祭壇そのものが肉のように出来ており、意志のある生物ではなかった。

(目的は何なんですか！？ それに、うう……気持ち悪いですわ)

精液という単語すら知らないリリィは、この自分の身体に付着した液体がいったい何なのかすら解っていなかった。

周囲を取り囲むロープを纏った不気味な信徒達が、手に握りしめる男性器。それ

すら見るのは初めてだったが——それが不浄なものであることは察することができた。

そしてそこから放たれる液体。エンジェルリリィにとっては臭くて汚いそれを一刻も早く洗い落としたかったがもはや事態はそんな些細なものではなくなっていた。

「汚いですわ！ 臭いですわ！ いい加減にこれを……え？」

祭壇の端から新たに姿を見せる肉塊。無防備に大きく広げられたリリィの股間の目の前で、鎌首をもたげるその姿は、信徒達の男性器によく似ていた。

「何を……するつもり、ですか……」

滲み出る汗。焦り。これから自分の身に降りかかろうとする災厄を、果たしてリリィは全て予測できたであろうか。

周囲の肉塊が蠢きだし、緩かった拘束がガッチリと固定され、足をばたつかせることさえ出来ない。さらには、股間の中心——女性器の入り口を守るレオタードが、無造作に肉塊によって引っ張られ、ちぎられる。

「ひっ！！ い、いやあああああ！！」

一刻も早く隠したい。いや、この場から逃げ出したい。リリィはパニックに陥った。



「ぎっ、いっ……いたいいいい！！」

無情に突き立てられる肉塊の男性器。誰も迎え入れた事のない割れ目に挿入されていくそれは、躊躇も前戯も一切なく、一気に奥へと突き刺さった。

ドンッという脳天を突き抜ける衝撃。

「かっ、はっ……」

口をパクパクさせ、今まで味わった事のない感触を全身で味わうエンジェルリリィ。股間にハンマーで杭を刺されたかのように、ズンズンと上下に運動するその動きに合わせて、リリィの身体も上下に大きく揺れる。

「あっ！ ひぎっ！ めっ！ 抜い——てえ！！！」

上下運動に合わせて切れ切れの絶叫をあげる。逃げようにも逃げられず、ただ肉塊による蹂躪を受けるだけの状態。始めは男性器状の肉塊による責めだったそれが、周囲の祭壇から湧き出る肉塊による一斉蹂躪に変わっていた。

(身体の、奥が、熱いですわあああ！！)

貫かれるたびに熱を帯びていく身体。そして疼き。決して気持ちよくななど無い筈の行為が、次第にリリィの中で快楽に変わっていく。

「はああっぎぎぎいいい いひいいい！！」

言葉にならない雄叫びをあげ、大波に翻弄される愛天使。見れば、魔法陣から別種の肉塊が姿を現しつつあった。それはリリィという生贄を求め、その未成熟ながらも肉付きのいい身体を貪り始めていく。

(き、もちいいいいい！！?)

自分が今どういう状態なのかも理解することが出来ず、リリィは咽び泣いた。そのリリィの身体には、薄っすらと刺青のような紋様が浮かび上がる。邪悪な肉塊による蹂躪は、その天使の力を奪い、邪悪なる瘴気を身体に刷り込んでいた。

「はひっ！ いひいっ！！」



肉塊による怒涛の蹂躪は終わった。

肉塊はエンジェルリリの身体を飲み込み、卵のような形状を形成していく。

(な、にも……考えられません……わ)

薄れゆく意識の中で、エンジェルリリの身体は卵の中でゆっくりと変貌する。

リリの精神は永遠の闇に閉ざされ、無限の時間を漂ったかに見えた次の瞬間、その肉塊の卵が勢い良く割れた。まさに卵の形状となって数秒後の出来事だった。

大量の、ドロリとした精液のような液体が卵から吹き出す。その中心にうずくまる真白に粘液に包まれた人の影。

パッ——

勢い良く起き上がったその人型。粘液が周囲に飛び散り、宙を舞う。糸を引いたように伸びる粘液は、その人型の周囲で幻想的な光景を作り出していた。

そして、その中心。大きく羽を広げた悪魔がそこにいた。

それはエンジェルリリに他ならない。天使が悪魔へと生まれ変わった瞬間だった。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

リリは激しく呼吸し、そして膝をつく。愛天使の衣装は、面影も残していなかった。

頭部に伸びた左右それぞれの角。背から生えた禍々しいコウモリのような翼。尾てい骨からすらりと伸びた尾。まさに悪魔そのものの姿だった。

(私は……一体……)

自らがどういう存在だったのか、愛天使としての使命も、谷間ゆりだった頃の記憶も無い。周囲の信徒達は、その光景を満足気に眺めていた。天使は墮天し、儀式は成功した。

先ほどまで愛のウェーブで満ち溢れいていた身体も、今は一切それが感じられなかった。禍々しい瘴気を放ち、妖艶で扇情的な姿を露わにしている。信徒達は一斉にひれ伏し、その悪魔を湛えた。

「うふ……うふふふ……」



その悪魔はゆっくりと立ち上がると、不敵に微笑んだ。

「なんて清々しい気分なのかしら……」

彼女はようやく思い出したのだ。自分は悪魔なのだ、と。この信徒達は、自らを崇め、讃える為にここにいるのだと。

「とっても気持ちいいですわ、この空気、この匂い……」

先程——天使だった頃のリリィが毛嫌いしていたその禍々しさは、今の彼女にとっては最高のものだった。そして、自らの股間をその長い爪で刺激を与え、かき回しながらゆっくりとひれ伏す信徒達の前へと歩いていく。

「さあ、お前たち……私が自ら洗礼を与えますわ……」

妖艶に微笑む女悪魔。その言葉に、信徒達は一斉に立ち上がると一斉にそのローブを脱ぎ捨てた。ローブで隠れていたその姿は、人間ではなかった。それらは悪魔界の住人達に他ならない。偉大なる悪魔を讃え、その誕生を待ちわびる者達。

「さあ、私を、私を楽しませなさい！」

そう言うや、リリィは正面の信徒の男性器を、自らの豊満な胸で包み込んだ。歓喜に歪む信徒の顔を、リリィは上目遣いで眺めながら胸で挟み込んだまま口に含む。

「んはあ……美味しいですわあ」

信徒は数秒も保たずに射精する。テクニックではなく、それは悪魔としての力だろう。一瞬の内に相手を絶頂へと導き、快楽を与える。そして自らはその精を糧とする。

相手が達するたびに、リリィの中に邪悪な力が満ち溢れていった。

信徒達はそのリリィを取り囲み、次々と自らの男性器を突き出して奉仕を求めた。一見立場が逆転しているかのように見えるが、それはリリィが一方向的に搾取する場でしかない。全てがリリィのペースで進められ、両手に男性器を握り、精液を浴びてはそれを自らの肌に染み込ませる。秘部に挿し込まれたペニスは、まるで女性器が口になったかのように締め付け、濃密な精を身体の奥に吸引していく。



乱交は果てることがなかった。

信徒達は入れ替わりその女悪魔へと自らの身体を捧げ、女悪魔は食欲にそれを受ける。

「あはあ！！ 最高！ 最高ですわあ！！」

教団は目的を達成した。

愛天使として悪魔の脅威であった彼女は、今や邪教の崇める悪魔へと墮天した。いや、させられてしまった。

やがて……女悪魔は教団を率いることになる。

邪悪な花嫁衣装にその身を包んだ女悪魔は、常にその手に信徒の男性器を握り、満足げに、そして妖艶に微笑む。

「うふふ、世界に救済を与えて差し上げますわ」

いつ、いかなる場合であっても、彼女は信徒を愛し続けた。

信徒は彼女に愛されることを至上の喜びとし、より一層の信心を彼女へと捧げる。

「ああ……そうだわ、天使のような愚かな存在は、皆悪魔になってしまえばいいのだわ」

素晴らしい思いつきのように独り言ちる。

そう言いながら、彼女は今日も信徒の男性器を貪り尽くすのだった。

END



邪悪の樹

邪悪の樹とは天使を捕らえ、その愛のウェーブを吸収して育つ魔界の植物の総称。

かつて愛天使をも苦しめた樹の種が、悪魔界から何者かの手によって持ちだされたい。そんな情報が天使界へ告げられて、天使達が独自に調査に赴いた。が、誰一人として帰ってくる者はいなかった。

そして、地上で人間として生活を送っていた愛天使達に、その調査の依頼が舞い込んだのだった。4人の愛天使は、それぞれ普通の生活を送りながらも、邪悪の樹が繁殖を続ける場所の特定を急いでいた。そんな中、谷間ゆり——エンジェルリリィがいち早くその場所を突き止めることに成功したのだった。かつて邪悪の樹に囚われたこともある彼女にとって、その樹の恐ろしさは十分に解っていたはずだった。だが、樹に囚われている天使の姿を見た瞬間に、冷静な判断ができなくなってしまっていた。

目の前の苦しむ天使を一刻も早く救いたい。新たに目覚めた愛天使の力を使えば、なんとか助けることが出来るかもしれない、との甘い考えもあった。

エンジェルリリィが、邪悪の樹の虜となるのに、それほど長い時間は必要ではなかった。地下から、空中から、ありとあらゆる方向から襲い来る邪悪の樹の蔦は、リリィの鞭を持ってしても全てを払い除けることができなかったのだ。

気付いた時には、エンジェルリリィは蔦によって手足を拘束され、反撃を行う事など不可能な状況に追い込まれてしまっていた。

「くっ……」

自らの未熟さ、浅はかさ、そして無力さに歯噛みする。そして、リリィは邪悪の樹に引き寄せられていく中で、自らの末路を見ることになる。それは囚われていた天使達の成れの果て。樹に取り込まれ、樹と一体化し、樹の種を産み落とし続ける姿を。

「ひっ、い、いやっ！」

愛のウェーブを吸い取られるだけではなかった。樹は天使そのものを取り込み、繁殖器官として利用していたのだ。まるで生物のように……。



エンジェルリリィはそんな光景を目の当たりにして、平静を保てなくなっていた。
当然だろう、それはつまり、これから自分がそうなるということを、明確に表しているのだから。

「う、ううう……おね、がい……ころ、して……」

未だに意識のある同化している天使の呻き声が聞こえてくる。

「い、いやあああああ！ 離して！」

その呻き声が、リリィを更なる恐怖に誘う。

そして、まるでその天使が助けを求めるように、邪悪の樹の蔦がリリィの身体を弄り始め、
肢体に絡みついていく。蔦の感触はまるで人間の肌のように柔らかかった。だが、体温と
いうものは一切なく、ひんやりと冷たい。そして表面が粘液で覆われていた。

「ひっ、き、気持ち悪い……ッ」

全身を這いまわる蔦、そして肌に吸い付き、リリィから愛のウェーブを吸い取っていく。

(ち、力が、抜けていきますわ……)

だが、それはほんの序章に過ぎなかった。

「いっ！？ ひあっ！！」

蔦は身体を弄るだけでは収まらず、リリィの敏感な箇所を責め始める。

尻、股間を覆うレオタードがずらされ、顎になった穴へと蔦は潜り込む。

「そんなところ、駄目ですわっ！ ぎっ、ひいっ！！」

有無をいわずに挿し込まれる蔦。愛のウェーブを吸い取られながら、蔦による陵辱が始まった。

「あ、ぐっあ！ ふあっ！ はひっ！」

蔦は機敏な動作でピストン運動を繰り返し、リリィの初めての場所を奪っていく。愛情も
憎悪も無い、一切の感情のない行為。

「うぐっあ！ や、やめてええええええ！！」



陵辱は続く。奪われるだけかと思われていた行為だったが、リリィは大量に与えられるものがあつた。邪悪の樹の精液——いや、樹液と呼ぶべきそれは、リリィの引き締まっていた腹部を大きく歪ませるほどに注ぎ込まれる。

「ぐえ……も、う、入りません、わ……」

下の口から注ぎ込まれる樹液の量は凄まじく、リリィは妊婦のような姿となっていた。

(おか、しいですわ……身体が、熱すぎ、ますわ……)

身体の、腹の中でタプンタプンと揺れる樹液。それが体中に染み渡っていく。

「う、あ、ああああ……」

呻き声が押し出されるように口からこぼれ、自らの膨れ上がった腹を絶望の眼差しで見つめるリリィ。

「もう、いやあ……こんな……」

先ほどまでの天使達も、恐らくは自分と同じ経緯を辿ったのだろう。状況は刻一刻と悪い方へと流れていく。このままでは、行き着く先は、邪悪の樹に取り込まれてしまう事。

(なんとか、脱出しないとはいけませんわ……)

それはずっと考えていることだが、全く希望を見出すことが出来ない。運良く、リリィの仲間たち——愛天使が発見してくれることを祈るばかりだが、果たしてそれまでに自分は無事でいられるだろうか。

(諦めてはいけませんわ……)

だが、リリィの望みはすぐに絶たれることになる。

「ひっ!? ま、たっ、あ、ああああぐっ!!」

挿し込まれる蔦。しかし、今度は様子が違っていた。何か硬いものを、そのパイプのような形状からひり出そうとしている。

「は、ぎいっ!! い、いたいっ!! 痛iiiiii!!」

ゆっくりとひり出されるそれは、邪悪の樹の種だった。



種はリリィの身体に収まった。

そして次の瞬間に、リリィの内部に溜まっていた樹液と混ざり合うことで爆発的な変化を始める。

「いひいひっ！！ が、あああああああああッ！！」

普段は到底出すことの無い絶叫を発し、その変化に翻弄される。外から見てははっきりと解るようにぼこぼこ腹部が変形し、内部で種が爆発したかのように形を変えていく。

「があああつ、ぎいあああああああああつ！！」

そして、2倍ほどに腹部が膨張し始め、そして変化は止まる。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

息も絶え絶えの状況になり、ようやく落ち着いたかに見えたが、それも一瞬の事だった。

「ぐっ、こ、今度は……な、んですの?!」

一瞬にして膨張した腹部。そこから産道に至る辺りの熱。疼き。あり得ないことに、リリィの身体は臨月を迎えていた。身体が腹部の中身を排出したがっており、リリィにはもはや自分の力でどうにか出来るレベルを超えていた。

「う、生まれ……ますわっ……」

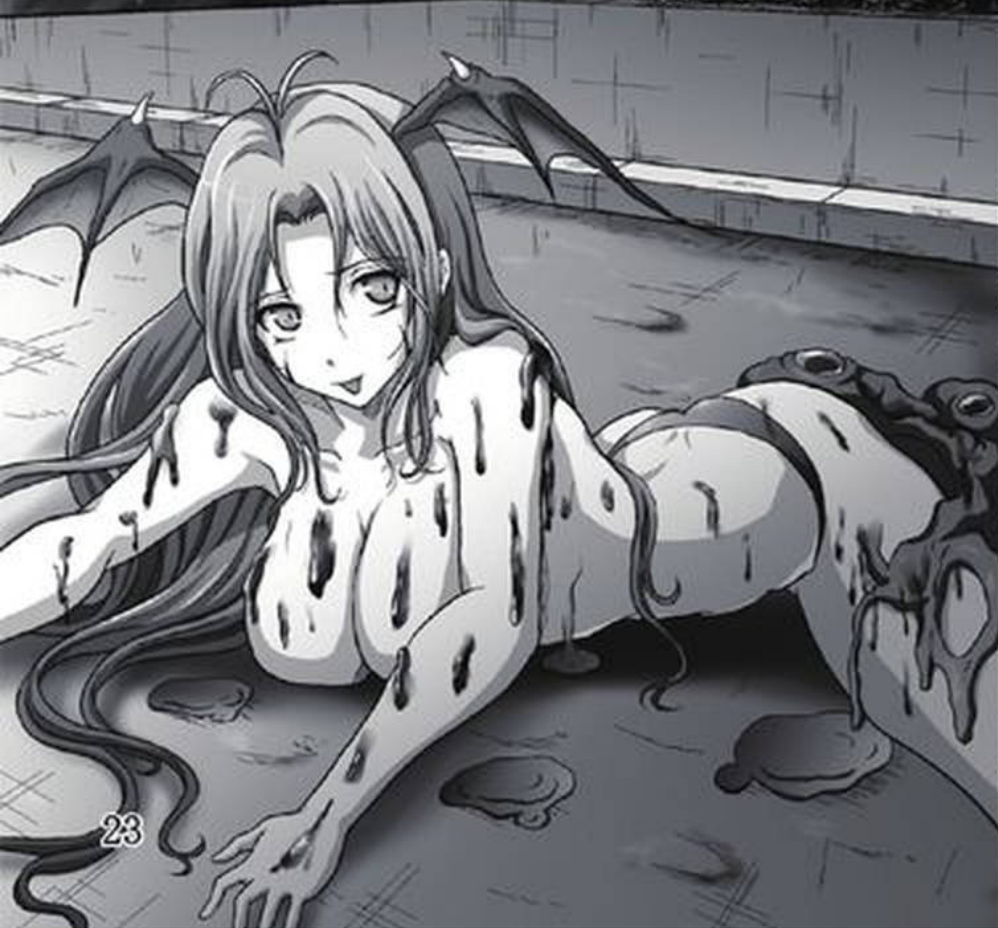
荒ぶる呼吸、垂れ落ちる汗と唾液。樹液によって身体の痛みが快楽へと変わりつつあり、出産の痛みがそれほどでも無い事に、リリィは気付いてはいなかった。

「で、でるううう！！ 出てきますわあああつ！！」

穴が限界以上に、ゴムのように広がり、そこから中の物体が顔を覗かせる。種がリリィの中でリリィの卵子と樹液と混ざり合い、卵へと変化したそれは、ゆっくりと外の世界へと現れる。想像以上の、自分の身体ほどの大きさもあるそれを見る余裕も無く、リリィはむせび泣きながら出産の激動に耐え続けた。

そして、産み落とした卵はべちゃりとその場に落ちて、割れる。

卵から顔を覗かせたのは、リリィそっくりの悪魔だった。



リリィの失踪から1日が経過した。邪悪の樹が失踪の原因であると結論付けた愛天使達は、リリィが邪悪の樹を捜索していた付近を重点的に探し始める。そこで出会ったのだ、リリィそっくりの悪魔に……。

それらは1体ではなく、複数だった。扇情的なコスチュームを纏うサキュバス。下半身が蛇の姿のラミア。両手が羽、下半身が鳥のハーピィ。まるで空想の魔物がリリィの姿となっているかのようなその集団に、愛天使はまったく手も足も出ずに敗北する。

天使の力が全く通用せず、一方的に攻撃を受け続けるだけの戦闘。

それらの魔物が、エンジェルリリィが産み落としたものだということも気付かず、愛天使達はその場に膝をついてしまう。

「くそ、どうなってんだ……なんでリリィとそっくりなんだよこいつら！」

そう言って地面に拳を打ち込む緑の天使、エンジェルデイジー。

「リリィに何かあったに違いないが、しかし天使の力が通じないというのはどういうことなんだ……汚れた悪魔ではないということか……これでは、浄化できない」

赤の天使、エンジェルサルビアは両手に握る剣をギリッと握りしめてリリィに似た悪魔達を睨みつける。

「みんな、諦めちゃ駄目！ リリィを無事に見つけるまで、私達は負けられないわ！」

絶望的な状況の中で、必死に仲間を励まそうとする桃色の天使ウェディングピーチ。

しかし、どれだけ励まそうとも、今の自分達が全く無力な存在だという事を認めるわけにはいかなかった。何よりも、大事な仲間が行方不明になっているのだ。

「フフフ……」

「ククク……アラ、モウオシマイ？ コレジャ、オマエタチモ、オカアサマトオナジヨウニナルシカナイナ」

「お母様、だと?!」

不敵に笑う悪魔から聞かされる衝撃の事実。



愛天使達は連れ去られた。と言っても、彼女たちが敗北した場所からそう遠くない場所。鬱蒼と生い茂る森は、全てが1つの樹の一部だった。

「ひっ?! り、リリィ……ッ!!」

仲間たちが驚愕するその姿。邪悪の樹と身体の半分以上が同化し、腹部が見難く歪み、愛のウェーブをゆっくりと摂取されながら卵を産み落とすだけの存在——樹の部位。

「う、あ……あ……ころ、して……え」

既に希望も無く、絶望すら通り越し、死を望むだけの部位となった愛天使エンジェルリリィ。瞳には何も映ってはおらず、既に精神が崩壊していた。

「そんな、リリィ! リリィ!!」

仲間の叫びにも反応することなく、ゆっくりと樹に侵食されていくその姿は、天使が悪魔に敗北する姿をこれ以上無い程に体現したものだだった。

そして、リリィから産み落とされる卵から、またも悪魔が生まれ出る。そう、天使の力と悪魔の力、双方を併せ持つ新種のそれは、天使の浄化の力など受け付けるはずもなかった。

「シバラク タノシンダラ、オカアサマノナカマニシテヤルヨ」

無慈悲に告げる悪魔達。

邪悪な樹の一部となったリリィの、そして他の天使達の目の前で、新たな犠牲者が増えようとしていた。リリィの悪魔に陵辱されながら、愛天使達はこれからの自分たちの未来の姿に恐怖し、そして泣き叫ぶことしかできなかった。

END



蝶々

1人戦う愛天使。

エンジェルリリィはその悪魔相手に苦戦を強いられていた。

その悪魔は、かつてリリィを窮地に追いやった蝶の姿の悪魔。

天使と悪魔が和解した現在、和解を快く思わない悪魔達が各地で目覚め始めていた。

この蝶の悪魔は、かつて浄化された蝶の眷属であるようだった。

「セント・スパイラル・ウィップ！」

新たな必殺技を繰り出し、なんとか応戦するエンジェルリリィ。

だが、蝶の悪魔はかつて戦ったそれよりも恐ろしい能力を持っていたのだ。

「キリがありませんわ……ッ」

数多の芋虫を生み出し、自らの分身として使役し、獲物を次々と繭へと変えていく。

この学園に突如として現れ、生徒を次々と繭へと閉じ込めてしまった。

そして、愛天使として偶然学園に残っていたリリィを追い詰めていく。

「どこまで抵抗できるか、楽しませてもらうぞ愛天使」

「くっ……決して天使は、悪魔に屈したりはしませんわ！」

凛としたリリィの、決然とした意思。

だが、状況は圧倒的にリリィにとっては不利になりつつあった。

もはや足の踏み場も無いほどに糸が敷き詰められた体育館。

包囲の輪を狭めてくる芋虫達。そしてそれを高みから眺める蝶の悪魔。

(何とかしないと、このままでは力尽きてしまいますわ……)

外からは判らないが、リリィの中には確実に焦りが生まれていた

このままではジリ貧なのは確実であった。この状況を打破する方法は1つ。

(あの蝶の悪魔を倒すしか、ありませんわ)

流石に悪魔との死闘を繰り広げてきた愛天使だけあった。

リリィは追い詰められながらもそのチャンスを伺っていた。



「しまった——!？」

ほんの一筋の糸、だが、リリィの動きを止めるには充分だった。

(なんて強靱なんですかの……切れませんわ!?)

すぐに断ち切ることができるかと踏んでいたリリィだったが、思いの外強靱だった。

「その糸はそう簡単には切ることは出来ん」

蝶の悪魔の高笑いが響き、芋虫達が動きの止まったリリィに一斉に糸を吹き付けた。

「きゃああああああつ!!」

襲いかかる糸に対し、避ける事も出来ずに絡め取られていく。

「さあ、お前たち、新しい肉だ」

“肉”という単語に、リリィは恐怖した。

周囲に林立する藪が、この学校の生徒のものであり、どのような経緯でそうなったのか。

全く判らないことが、恐怖に拍車をかけていた。

「は、離れなさいっ! こんなこと、許しませんわよ!」

いくら威勢のいい言葉を吐いたとしても、この状況では脅しにすらなっていない。

そんなリリィの身体に群がる芋虫。

「ひっ、は、離れなさい!」

糸でどんどんと身動きが取れなくなっていく。虚勢も芋虫たちの前では全くの無力だった。

その芋虫たちは、伸縮運動を繰り返し、リリィの身体の上を自在に這いまわっていた。

(き、気持ち悪いですわ……っ)

自分の身体の上を、芋虫が這いまわるという光景に絶望していたリリィ。

「ぐっ、ひっ、あああつ」

突然だった。秘所を守るレオタードをずらして侵入してくる芋虫。

「むぐう!! んんんんんっ」

叫び声を上げた口にさえ侵入を試みる芋虫。穴という穴へ、芋虫は群がり始めたのだ。



「あ、ぐっ、う……」

ゆっくりと地獄へ突き落とされていくのはこういう事だろう。

1匹1匹、芋虫がリリィという肉袋へ潜り込んでいき、肉袋はパンパンに膨れ上がる。

「か、は……も、う、無理、ですわ……」

妊婦を超えた腹回り。本来穴など無い乳首にさえ芋虫は侵入し、形の良かった胸は大きく弛む。腹、胸の皮の下や肉の中で芋虫が蠢いていることが外からも解る。

「良い姿になってきたじゃないか愛天使。先ほどの威勢はどうした？」

嘲笑、煽り、それらを受けても、リリィには言い返す余力がまるでなかった。

「はあ、はあ、はあ、はあ……こんな、こんなことって……」

あまりにも現実離れした光景。自分の身体がここまで変貌してしまうものなのだろうか。限界を超えた許容量。苦しいという段階はとうに超えてしまい、今では芋虫が蠢く感触だけが身体中に響き渡る。

「安心しろ愛天使よ。その子達も、今に大人しくなる」

「……？」

乱れた髪。芋虫の、そして自分の体液が混ざった汗が滴り落ちる顔を上げ、蝶の悪魔を見上げる。リリィにはその言葉の意味が理解しかねていた。

「その子達は、貴様の身体の中で溶けて融合していくのさ」

言葉とともに響き渡る笑い声。

「ひっ——！！」

自分の身体の一部となることへの恐怖。この芋虫が、自分と1つになる。それはリリィにとっては絶望以外の何物でもなかった。

「い、いやあああああああッ！！ いやあッ！！」

制限されている行動の中で必死に頭を降る。さらに髪が乱れ、汗と涙、そして体液が周囲に飛び散る。もはや凜とした姿のエンジェルリリィの姿など、どこにも無かった。



蝶の悪魔が言ったように、芋虫の蠢く振動は感じられなくなってきていた。

「あ、うあ……ああ」

放心状態のリリィは、その変化に薄っすらと気付く。それは、身体の中の芋虫達が身体の中で融合していった。もしくはしている証拠なのだ、と。

「もう、許して……」

うつむきながら、吐息のように懇願の言葉が吐出される。もう、泣き喚く気力すら残っていないかのようにだった。

「ほほほ、まだ許しを請うのは早いぞ愛天使。貴様の絶望はここから始まるのだからな」無情な宣告。今まで味わったものが、序章に過ぎないと蝶の悪魔は告げたのだ。

「そ、そんな……」

やがて、全ての芋虫がリリィの中で溶け、リリィの肉体と混ざり合った。蠢きの全てが消えたのだ。ここから何か起きる。困憊しているリリィが、ゆっくりと心を身構え始めた矢先に、それは起こった。

「あ、ああ、あう！！」

芋虫の蠢きではない、それは自分の身体が脈動し、疼きだしたのだ。胸、股間を中心に、それは尋常ではない感覚でリリィの脳を襲う。

「ひ、ぎいいいっ！！」

乳首が盛り上がり、陰核がヒクヒクと持ち上がり始める。乳頭が勃起し、そして――。

「ひあああああっ！！ な、なんでえええッ！！？」

情けない叫び声を発し、盛大に母乳を吹き出す。それも人間では有り得べからざる大量の母乳。さらには持ち上がった陰核が、ムズムズと肥大化を始めて男性器のような形状となるとそこからも大量に白い精液のような液体を噴射した。

「と、止まりませんわっ！ と、止まらないいいいッ！！」

リリィの身体は既に人間のものではなくなっていた。



リリィは喚き散らしながら、母乳と精液の噴射を続けていた。

「い、ああああああがががががあああッ」

普段の彼女からは想像も出来ない喚き声と、噴射音が響く悪夢の光景。

その母乳と精液は、一定量を飛ぶと固体——糸へと変わっていった。その糸は、リリィに巻き身体を徐々に覆っていく。リリィが拘束された当初から存在する繭と、リリィが張り付き、さらに自らが吹き出す糸によって1つの繭を形成していく。

(ピーチ！ デイジー！ サルビア！ 助けて！！ このままでは、私は——)

その祈りも虚しく、リリィは完全な繭へと変貌した。人の形が張り付いた異形の繭。

「ほほほほっ！ 愛天使よ、安心してその繭の中で生まれ変わるがいい」

体育館に生まれた新たな繭。愛天使は悪魔に敗北し、今まさに悪魔の眷属へと生まれ変わろうとしていた。

(私、は……どうなったんですの……)

繭の中は、羊水で満たされ、閉じ込められたリリィは眠り始めていた。意識はぼんやりと白濁し、身体の上下の感覚すら無く、無限の闇の中に漂うようだった。

(私は負け……た……悪魔に……)

愛天使として、数多の悪魔を浄化してきた彼女にとって、恐らくは最初で最後の敗北となるだろう。その身体は、徐々に愛天使という名前からは大きく異なるものへ変貌しつつあるのだから。額に瘤が出来たかと思うと、触覚がゆっくりと生えていく。

(なんだか、とっても……心地良いです、わ……)

母親の胎内にいる感覚とはこのようなものだろうか。温かい羊水に包まれ、波に漂うようにゆっくりと揺られ、光が全く届かない暗闇の世界であるにも関わらず、恐怖は全く感じない。ただひたすらその身を任せて、眠っていれば良いのだ。

(嗚呼、このままずっと、ここで眠っていても良いですわ……)

それは心を蝕む墮落。リリィは自らの使命すら忘れつつあった。



リリィが繭へと変貌して、外の時間では未だ1時間も経過していない。しかし、内部では1年以上経過したように感じられていた。

(もう、どうでも良いですわ……)

繭の中のリリィの身体は、既に人間のものとは大きくかけ離れていた。

両の腕、両の脚は、昆虫のような鉤爪となり、体毛に覆われていた。形の良かった胸も、肥大化した状態のままとなり、まるで芋虫がそのまま胸になったような形状に変化している。腰からは節の付いた昆虫の尾、それは蝶の尾だった。

(そう、愛天使の使命も……あい、てんし……?)

長い時間を繭の中で眠っているように感じていたリリィにとって、外界での自分がどういう存在だったのかが、ぼんやりと薄れたものになりつつある。

「ほほほ、エンジェルリリィよ、我が眷属として生まれ変わるのも、あと少し……」

外から聞こえる声は、リリィにとって母親のそれに感じられた。

(心地良い、ですわ……)

全てを忘れてその身を委ねる。だが、そんな内面とは裏腹に、身体は変化に連れて激しく動きをみせていた。寝返りではなく、身体がまるで別の生き物のように動くのだ。

リリィではない蝶の悪魔と化しつつあるその姿。

「ゴポッ ゴポッ」

リリィの口から、尾から、穴という穴から泡が出ては羊水を揺らす。

もはや繭の中での胎動の時は終わり、誕生の時へと移ろうとしていた。

(い、やだ……出たく、ない……)

今自分がどういう姿となっているかも解らないまま、リリィはこの安楽の場所から抜け出ることを拒んだ。ここでは不安も恐れも無い。ましてや天使としての重い使命からも開放されるのだから。

「う、うあああああああああああつ!!」



リリィの願いは叶えられることはなかった。その悪魔となった身体が外界へと出たがっている。心を見捨て、身体はその鉤爪で繭の内壁をえぐり始めた。

人間だった頃は、決して引き千切ることさえ出来なかった繭の糸が、その鉤爪によっても簡単に切り破られていく。リリィがそう命じているわけではない。身体が勝手に動いていくのだ。

繭を切り裂いて生まれた悪魔——蝶の姿となったエンジェルリリィ。

羊水を纏い、ゆっくりと上半身を起こして外界を眺める。

(あ、れ……)

ほんの数時間の出来事。先ほどまで愛天使として蝶と芋虫に対峙していたはずの彼女は、ぼんやりとしたまま異形の姿となってズルズルと這い出てくる。

「え、あ……」

自分がどうなったのか飲み込めていない彼女だったが、自分の身体を引き摺るために床を握る手に視線が写った。否、握っているわけではなかった。

「い、いやああ——！！！」

5本の指など存在しない鉤爪。昆虫のようなその腕を見て彼女は絶叫した。

尾てい骨には、胴体以上に巨大な尾。そして芋虫のような胸。背には羊水に濡れて萎れてしまっている羽。

見れば見るほど人間からは大きくかけ離れてしまった自らの身体。

「い、いやっ！ いやですわこんなの！！」

泣き叫ぶエンジェルリリィの成れの果て。そこへ蝶の悪魔が自愛に満ちた声をかける。

「美しいぞパピヨンリリィ……お前はまさに生まれ変わったのだ」

(う、美しい!?)

その言葉にはっきりと戸惑いを見せるリリィ。醜いとは思えど、美しい等とはとても思うことができなかった。



蝶の悪魔に生まれ変わったリリィは空腹を覚えていた。物質的なものではない、それは天使や人間が持つ愛のウェーブ。今のリリィには、その愛のウェーブが一切存在しない。

「そうだ、奪うのだ。悪魔である我々にはそうするしか道が無い」

“悪魔”に含められてしまった自分の立場に歯噛みするが、この空腹は抑えようがなかった。だが、目に映る場所に愛のウェーブを持つ存在は皆無だ。

しかし、感じる。膨大なそれを持つ存在が、ここへ向かってくる。その額に生えた触覚がそれを敏感に察知していた。

(エンジェル……ダイジー……)

人間だった頃の無二の親友。多少ながらも人間の心を残しているリリィだが、その愛のウェーブには抗い難かった。

「リリィ！！」

体育館に駆けつけたダイジーは、しかし次の瞬間、天井から襲いかかるリリィによって一瞬の内に真後ろから抱きすくめられていた。

「嗚呼、ダイジー、ダイジー……」

だが、次の言葉はダイジーを驚愕させるのに充分だった。

「とっても、とっても美味しそうですわ……」

「ひっ……り、リリィ！？ 何を！？」

強気な彼女の見せる怯え。悪魔に対してではなく、親友の変わり果てた姿と言動にパニック状態となっていた。

「駄目、もう我慢できませんわ……！」

リリィはその長く食管状になった舌を、ダイジーの驚いている顔——その口内に容赦なく差し込んだ。彼女の舌を絡め、引っ張り上げ、唾液をすすする。

「は、はへへえ！」

ダイジーは満足に喋ることも出来ないまま、かつての親友によって蹂躪されていった。



デイジーの四肢は糸で拘束されていた

芋虫が群がりデイジーの穴という穴へと入りこみ、デイジーの奥へと潜り込んでいく。

「うっ、あ……は、はなせえ……」

弱々しく藻掻くデイジー。先ほどまでのリリィと違う点は、芋虫による侵食を受けながら蝶の悪魔と化したリリィによる陵辱を受けていることだった。

「あっ、はあっ！ 美味しい！ とっても美味しいですわ！！」

股間に生えた芋虫ペニス。そして食管。その双方から、デイジーの愛のウェーブを貪り食うパピヨンリリィ。陵辱は既に1時間が経過しようとしていた。

「も、う、やめてくれ……リリィ……お願いだ、元に……」

少しでも残った人間の心にデイジーは一縷の望みをかけていた。だが、それは無駄なことだと思いきらされつつあった。

「やめられませんわ！ だって、悪魔が天使を食うのは当然ですもの！」

陵辱を繰り返すごとに、リリィからは人間の心が失われていっていた。

「そうだ、どんどん食らうのだパピヨンリリィよ」

蝶の悪魔は満足気にその光景を眺めている。元々が強力な天使ただだけに、悪魔に生まれ変わったリリィの力は、蝶の悪魔のそれを凌駕していた。さらに、今まさに愛天使の愛のウェーブを吸収し、パピヨンリリィは強大な悪魔へと変貌しつつあった。

「さあ、もっと私に愛のウェーブを！」

「ひっ！ ぎい……！！」

捻り上げるように、芋虫ペニスでデイジーを突き上げる。デイジーの下半身の感覚は、もはや度重なる陵辱によって完全に麻痺していた。

「さあ、パピヨンリリィよ、そろそろ仕上げに映るのだ」

頃合いは良しと見て、蝶の悪魔が告げた。そう、デイジーもまた、リリィと同じ運命を辿ろうとしていたのだ。



デージーは繭に繋がれていた。

その繭を作り出しているのは芋虫と、パピヨンリリィだった。

芋虫のような胸とペニスから吐出される糸。それがデージーの身体を繭へと繋ぎ、そしてその身体を徐々に覆っていく。

「い、やだ……悪魔になんて……絶対に……」

かすれる声でデージーは呟く。だが、デージーの身体もまた変貌しつつあったのだ。

肥大化した胸、股間から生えた芋虫が、糸を吐き出し、自分で自分を糸で包み込んでいく。

「あはあ……素敵すでわあ、エンジェルリリィ」

ダラリと伸びた舌を垂らしながら、射精し続けるパピヨンリリィは、その哀れな愛天使の末路を眺め、邪悪に微笑む。

それがかつての自分の姿と重なっている事など気付くこともなく、新たな仲間の誕生を心から喜んでいた。

そう、愛天使は他にもいる。まだ学園の生徒達も大勢残っているだろう。それら全てを繭へと変えてしまう事が、今のリリィの至上の喜びとなっていた。

「ピーチ……サルビア……」

残った仲間の名前を呟き、デージーは涙を流す。リリィを救えなかったことへの悔しさと、自分が悪魔へと変わっていく恐怖の涙だった。

「あら、泣く事なんてありませんわ……だって、もうすぐ全員が仲間になるんですもの」

そして、デージーは完全に繭となった。リリィは、その繭を抱きしめ、幸せそうに繭へと語りかけるのだった。

END



Before



After



あとがき

……というわけで、如何でございましたでしょうか？

いきなり質問から申し訳ありません。

『ウェディングピーチ』というジャンルは、最近あまり見かけませんね。

寂しい限りです。

当時はセーラームーンのエロ特化。そんなイメージがありました。

実は今もあまりイメージは変わってはいません。

ただし、OVA版となると話は別です。

何よりもピンチが少ない(猫になりましたけども)のです。

お陰で、悶々とした日々を過ごして参りました。

なんだか中途半端に終わってしまいましたしね……。

OVA版(以下DX)は、衣装が凄くツボでした。作画も悪く無いですし、

なにより、立ってるだけでエロかった……あれでTV版のノリなら最高でした。

ですので、今回作品として出せたことは非常に満足しております。

全員はやらないつもり……です。

小説部分がかなりザックリしてしまったこととお詫び致します。



協力して下さった作家様方、この度はこんな趣味丸出し(いつもですが)に付き合っ頂き、この場を借りてお礼申し上げます。

どうもありがとうございました！

奥付

- 作品名：墮落の百合天使
 - 発行：墮落事故調査委員会
 - 代表者：シューミット
 - 発行日：2013年12月31日
 - 印刷：大陽出版株式会社
 - 連絡先：sch-mit@goo.jp
 - Web：<http://schmitxxfallen.blog61.fc2.com/>
-
- この物語はフィクションです。実在の人物、男体、事件とは一切関係ありません。実際にこのような行為に及んだ場合、法律で罰せられるおそれがあります。
 - 本作品成人向けです。18歳未満の方の購入はお断りさせていただきます。
 - 本作品をWeb上などへの無断で掲載する行為はおやめ下さい。
 - ご意見、ご感想などありましたら宜しくお願い致します。



Presented by

墮落事故調査委員会



18歳未満の方の購入・閲覧を禁じます。